

Dei C のこと

・共産主義青年団・

カエー 回 おおぜいひろし

Dr. I. C. というのは (Dest-
nuction is Construction)
の略である。「破壊こそが創造で
ある」とするこのグループは、別
名をへ共産主義青年団」と名乗る
主共主義者である。

このD. I. C.のことを、ぼく
がはじめに耳にしたのは、数年前
の『月刊キブツ』紙における中村
君の沖繩の記事を読んだ時だった。

当時、D. I. C.は、沖繩の最北
端にある、村ぐるみの協同組合化
に成功した例として注目されてい
る奥部落(このことについては、
水津彦雄著『日本のユートピア』
大平出版を参照のこと)に入り込
んで、共同体を組織していた。否
・正確に表現するならば、それが
「共同体」と映ったのは、ぼくら
の勝ち目であって、彼ら自身
には、彼らが「共同体」を意識す
るものはない。むしろ、彼ら
は、今流行りの共同体ムードに批
判的である。だからといって、彼
らへ共同化を言わないわけ
はない。

例えば、毛沢東の『愚公山を移
す』の寓話を持って来て、「私た
ちは、奥の人が、周囲十数キロに
も渡って築きあげた猪垣のことを
知って驚きました。……一体、ど
こからこんな大きな力が出て来る
のだろうか」と考えました。自分
一人のことだけを考えていたので
はとてもできない。……と述べて
いる。また、「電力公社がなく那

頼にも電気がなかった時代に、奥の
皆んが自力で電気を起していた」
ということを知りて、彼らは、中国
の人民公社やそのへ自力更生へのス
ローガンを想起するのである。これ
らを見ても、彼らにとって「共同化
」が急務の革命的力として評価され
ているのが想像できるのである。

誤解を恐れずに言うならば、人民
公社がどうであるように、共同体は
目的化されてはならない。人民公社
は、被抑圧人民が解放を勝ち取るた
めの方法であると、彼らには把握さ
れているようだ。それは、正しい社
会革命とともに、政治革命をも、そ
の課題としていっていることからも、
当然であろう。

奥部落は彼らの 先生であった

彼らが現在展開している運動は、
文化革命に見られた、いわゆるへ下
放の運動である。――「人民に尊
び、人民に奉任する」というのがそ
の目的である。

「私たちは、今の学校のあり方に
は反対です。今の学校では、汗水流
して働いてきた者の苦労を教えず、
先祖代々受け継ぎ発展させてきた知
恵を教えないばかりか、それらを「
無駄なこと」「非科学的」「迷信」
「時代遅れ」と言っでバカにしてい
ます。……私たちは、世の中の実際
の中に入り、汗水流して働いている
人や年寄から昔のことを学び、今の
世の中の実際のことを学びたい。」

その後で、やはり毛沢東が引用され
る。「学生は、実践の経験のある労
働者・農民の中から選抜し、学校で
何年か学んだあと、再び生産の実際
の中へと戻るようにしなければなら
ない。」「知識を得ようとするれば、現
実を改革する実践に参加すること
ある。」

「農村の人は、自分のためよりも
カエーに部落のため、集団のためを考
えるという精神を持っている。農村
の人は、自分たち一世代だけでなく、
永く子々孫々まのことも考えるとい
う精神を持っている。農村の人は、自
分たちのことは自分たちでやるとい
う自力更生の精神に富んでいる。」
彼らは、先生―生徒の関係をほっき
り設定しようとする。彼らの先生は
学校に居るのではなく、クワを持つ
生きた農民であるという。その意味
で、ユニークな協同化社会を形成し
ている奥部落は、まさに彼らにとっ
て恰好の先生であったのである。

これは、赤栄郷共同体の理論合
宿で話された、「共同体と教育」の
テーマにおける、①公教育、教育制
度の否定、②職業としての教師の否
定、③労働者、農民から学ぶことの
必要性、の三点と重複するものであ
る。

それでは、具体的にD. I. C.の
仲間たちが、奥部落に定住すること
によって何を得たかについては、次
の三点に要約することが出来る。「
①『愚公山を移す』の精神を学んだ。
②『自力更生』の精神を学んだ。
③農民の種々の生活、知恵、やさし
さを学んだ。」と云う。

